

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設名	空飛ぶ三輪車・野口第2保育所
施設所在地	東京都東村山市野口町3-7-5
法人名	NPO法人 子ども自然探検隊空飛ぶ三輪車

1. 活動のテーマ

<テーマ>

植物に親しもう① ヘチマのたわし作り

<テーマの設定理由>

(テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など)

今年度開園した当園において、園庭の環境整備が必須である。身近に植物があふれ、子どもたちの好奇心をくすぐる園庭づくりを、子どもたちと一緒に、行っていきたいと考えた。近所に園の畑を借りていることから、職員はもとより、農作業や庭仕事の経験が豊かな園児たちであるという強みを活かし、より植物への親しみ、関心を広げてゆきたいと考えた。

その中でもヘチマのたわし作りは、つる性植物で棚の設置により夏場は園庭の日陰となる他、入園したばかりの年中児が手洗い場にあるヘチマだわしに興味を持ち、「これなあに？ヘチマって緑じゃないの？」と疑問をもったことから、テーマとして設定するに至った。

2. 活動スケジュール

4月 種まき

5月 棚づくり(親、保護者と)

6～8月 水やりなど

9月～11月 ヘチマの収穫・味わう／たわしづくり

12月 ヘチマ水づくり

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

(活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具)

- ・園庭づくり(柵、畑、棚の設置)
- ・畑の管理(苗床づくり、畝作り、)
- ・購入品(棚用の丸太、物干し竿、ボトル、)

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

4月～7月 子どもにポットに種まきをすると同時に、畑にもタネをまく。成長を見守るものの、ポットの種はウリハムシと猛暑にやられ、庭での栽培は困難になったが、畑ではよく育ったためそちらで経過観察とともに水やりなどの世話を子どもと行った。

8月～10月 実り始めたヘチマを収穫し、給食で味噌汁や煮物等にしてもらい、味わう。

11月 大きく成長したヘチマを収穫し、たわしに加工する工程を保育として行った。

①収穫したヘチマに包丁やノコギリで切れ目を入れ、中に水が入るようにしてから外で数週間漬けおきにする。その際、ヘチマの中を腐らせるために泥水をつくる。

②何度が水替えをしながら実と皮を腐らせる。十分に熟成されたところで子どもと引き上げ、皮を剥き、タネを出し、丁寧に流水で洗い流したのちに天日干しした。

12月 たわしづくりのためにヘチマを収穫する際、「茎から水がたくさん出ている」と気がついた子どもの発見から、ヘチマ化粧水づくりを行うことにした。

①ヘチマの根本を切り、茎をペットボトルに差し込み、雨などが入らないよう口をアルミホイルで囲っておく。経過観察を行う。

②1週間後、ボトルの中に溜まったヘチマ水を煮詰め、濾過する。マイボトルに絵を描いて自分の化粧水入れを作る。化粧水として肌につけてみる。ニオイや質感など感じたことを言葉にして話す。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)

・ヘチマの収穫中、年長児が次々と「茎からいっぱい水が出てくるよ!」というので、保育者が「ヘチマ水っていってお肌にいいらしいよ」と話すと、当時お化粧ごっこなどが流行っていた女の子たちを中心に、肌にぬりはじめた。泥水に漬ける前段階として切り込みを入れる時には「ヘチマパックにした!」と薄くスライスした実を頬に貼り付けて「すべすべになったよ」と言いながら遊んでいた。また、年中児も「切ってもあまり水は出てこないね」「ぬるぬるしててきもちいいね」などと発見したことを次々に口にする姿が見られた。

・「たわしにするにはこれをどうする?」と保育者が問いかけると、すかさず「くさらせる!」と回答する年長児。保育者「水だけじゃ腐らないよ。何が必要?」園児「むし?」保育者「その目に見えない虫がいるのはどこでしょう?」園児「土!じゃあ土を入れよう!」と園庭にある畑から土を持ってくる子どもたち。砂場の面と畑の面を分けた園庭づくりが活かされた。

・ヘチマ水に気がついた子どもがいたので、「化粧水もとってみる?」と新たに提案すると、熱心に興味を示していた。一緒に作り方の工程を調べ、上記の要領で子どもと化粧水づくりのプログラムを行うと、「朝お母さんとヘチマ水溜まってるか見てきたよ!」と経過観察を保護者とも行う様子が見られた。

写真は3ページ目に添付

5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

栽培する中で、変化する植物の成長を感じることにとどまらず、加工する過程ではニオイや触り心地などにも注目して植物と向き合うことができた。

担当者が想定していたのは、たわし作りまでであったが、子どもたちの気づきと関心から、化粧水づくりという新たな保育のプログラムを展開することができた。植物への関心が広がったことはもとより、子どもの気づきを汲み上げ、保育の活動に取り入れることで、子どもたちはより積極的に活動に参加し、自分たちでアイデアを出したり、経過観察を保護者と一緒に行うなど自発的な行動が増え、様々な広がりが見られた。

また、園庭で行っていたことから、小さい子のチームや送り迎えの保護者も興味を持つことができ、植物の面白さを共有できるプログラムになっていたことが、保育者間で報告することによって見えてきた。

空飛ぶ三輪車・野口第2保育所

すくわくプログラム

2024 年度 活動報告 添付写真

植物に親しもう①へチマのたわし作り



